

## 論文の内容の要旨

論文題目 台湾における二十世紀前半の都市改造以降の  
都市空間及び建築の変容に関する研究

氏名 徐 新堯

### 研究背景及び問題意識

日本と台湾の都市の近代化は双方とも同じ時期に日本政府によって行われたにもかかわらず、その手法や結果は大きく異なっていた。台湾の都市近代化において最も重要な都市改造事業の「市区改正」は台湾の自然発生的な伝統都市空間を配慮なく塗り替え、既存の都市空間を切断し、「ヘタ地」を始め様々な都市景観や発展上の問題を起こした。

しかし、いわゆる切断されたままの都市空間を見つけるのは意外と難しい。切断されたとはいえ、都市空間はほとんどが何らかの形で新たな状況に基づき再編成したのである。その再編成の仕組みについて、これまで青井哲人（2006）や曾旭正（2006）などの研究があったが、彼らによる単純化されすぎた論理の中で、都市空間再編成における空間の多様性と柔軟性及び都市が備わっている自発的な調整やヒーリング能力が間接的に否定された。よって、空間再編成の仕組みを改めて検討する必要がある。

### 研究目的

以上の問題意識を踏まえ、本研究は埔里を研究対象とし、二十世紀前半台湾で行われた市区改正以降の都市空間や建築の変容の実態を調査し、近代都市改造によって触発された都市空間再編成の仕組みを解明することを目的とする。研究目的は具体的に次の二点が挙げられる。

- (1) 都市空間再編成の仕組みの複雑性を改めて検討すること
- (2) ポスト市区改正都市の町並み形成との関連性を解明すること

### 研究構成及び内容

本研究は台湾の中部に位置する埔里という街を取り上げ、前述の単純化されすぎた論理の流れを修正し、改めて都市空間再編成の仕組みを検証するアプローチとして、新たな論理の流れを提案する。この流れに基づき、研究構成と内容は大きく三つの部分に分かれる。

- (1) 土地再編成のパターンとその規定要因（第三章）
- (2) 敷地タイプと建築類型との関連性（第四章）
- (3) 既存建築類型の変遷と継承状況（第五章）

### 第三章 土地再編成

市区改正が行われた後、既存の都市空間が大きく変わった。その中、従来の土地割りが如何なる規定要因によって、どのようにして再分配したのだろうか。土地の再分配によって如何なる敷地タイプが生まれたのだろうか。本章は市区改正前後の地籍図を用い、土地の時系列変化を追跡し、土地再編成の仕組みと敷地の生成要因を解明する。

#### (一) 街区の形成

細部計画のない埔里の中心地の街区の形成過程を探るため、都市計画実施の歷程と実際の街区内部空間の変遷について説明する。結果として、従前の土地形態次第で、街区の空間構造は実に多種多様であり、一般性を持っていないのが分かった。さらに、住民による自発的な都市空間の再編は昔の道路、水道、城壁と新たな計画道路で規定された枠組みの中で行わなければならないため、街区レベルではなく、敷地レベルの変容が空間再編の鍵となると考えられる。

#### (二) 土地の再編成パターンと規定要因

改めて外部空間ではなく土地の変遷から見ると、その変容は劇的だった。土地再編成のパターンに様々な要因が絡まっているが、その変容の傾向は大きく(a)「細長い短冊状の土地」(b)「不等辺多角形の土地」(c)「宅地化されていなかった土地」の三つの「従前の土地形態」と「計画道路に面しているかないか」の二つの要因に収斂することができる。土地の再編成において、見えない一筆一筆の土地の範囲を表す「筆界」が暗黙のルールとなり、多様性の富んだ敷地タイプを生んだのである。

#### (三) 市区改正により生まれた多様な敷地タイプ

市区改正以降、在来都市と近代都市計画との不具合を解消するために自発的に行われた土地再編成において、分割の法則は簡単だが、(1)「従前の土地形態」の継承と制約(2)複雑化した「敷地と外部空間との関係」(3)土地再編成技術の欠如の三つの要因の相互作用により、予期せぬ多様な敷地タイプが生まれたのである。できた敷地は大きく「短冊状の敷地タイプ」と「非短冊状の敷地タイプ」に分かれる。これらの「非典型的な」敷地タイプに応じ、当然既存する建築類型がそのまま当てはまることができない。よって、建築の調整は起きると考えられる。

### 第四章 敷地と建築

全体性の欠けた自発的な土地の再分配には限界がある。その土地再編成の不足に応じて建築は如何に調整し補うのだろうか。敷地と建築との関係を探るため、敷地の変化に応じて建築が如何に変容したのかを意識しながら、調査範囲内のすべての建物を確認し、建築実態の調査を行った。そして、その結果に基づき、以下の三つのテーマに分け、敷地と建築との複雑な関係を解明しながら、都市空間再編成の仕組みに触れる。

#### (一) 都市空間再編成の実態

都市空間再編成の実態を探るべき、現地調査で収集した様々な空間再編成のパターン(17種類)を(1)土地再編成(2)土地再編成+建築変容(2)建築変容の三つの種類に分けて多様な

状況と対応方法を見た。結果から言うと、市区改正によって引き起こされた都市空間の再編成において、必ずしも土地の再編成が伴うとは限らないのが分かった。従って、第三章でまとめた「土地再編成」の結果に加えて、「外部空間条件の変化」も建築類型の変容を引き起こす大きな要因の一つとして考えられる。

## (二) 「外部空間—敷地—建築」の一体化の関係の再構成

以上の空間再編成のパターンの中で、「外部空間」、「敷地形態」及び「建築類型」の三つの要素は常にある程度継承されながら、新たな状況に応じて調整され、そして新たな秩序が作り出されるのである。「外部空間—敷地—建築」の関係の再構築の観点から見ると、都市空間の再編成の目的は市区改正によって一回崩された既存する「外部空間—敷地—建築」の関係を修復することであると考えても良い(=既存する秩序の復旧)。ただし、元の「外部空間—敷地—建築」の関係に戻れない場合は、新たな条件によって新たな「外部空間—敷地—建築」の関係が求められる(=新たな秩序の構築)。17種類の空間再編成のパターンを改めて「外部空間—敷地—建築」の関係の再構築の観点から分析した結果、下記の三つの関係再構築のパターンにまとめることができる。

- (1) 「敷地」が継承される場合
- (2) 「既存の建築類型」と「敷地」との関係が継承される場合
- (3) 「敷地」と「外部空間」との関係が継承される場合

## (三) ポスト市区改正都市の町並みの形成

市区改正の影響の議論になると、市区改正計画によって直接的な影響(新たなファサードを持つ街屋、ヘタ地、切断面など)がよく取り上げられていた。しかし、それは市区改正による「一次的影響」に過ぎず、町並みの形成に対する市区改正の影響については「二次的影響」、即ち「都市空間再編成」の影響を語らなければならない。改めて、ポスト市区改正都市の町並みの形成について、「外部空間—敷地—建築」の関係再構成の観点から分析した結果、(1)「外部空間—敷地—建築」の再構成の限界(2)ポスト市区改正都市における「表層」の働き(3)建築ファサードの象徴性:カモフラージュの性格などの側面から、ポスト市区改正都市の町並みと都市空間再編成との関連性が確かめられた。

## 第五章 建築の変容と継承

市区改正によって建築の変容も引き起こされたが、いままではこれらの建築的調整はその場凌ぎの調整と看做されてきたため、研究対象として注目を浴びなかった。本章では、これらの建築の変形に改めて着目し、調査現場に取り壊された隣接する建築の痕跡を通じ、敷地と用途の変遷を確認しながら、既存建築との継承関係を明らかにする。そして、地域の建築類型の発展に対する市区改正の影響について議論する。その結果、建築類型の発展に対する市区改正の影響は大きく二つの側面から見るができる。一つは「土地再編成」の影響であり、もう一つは「外部空間条件の変化」の影響である。

## (一) 土地再編成

土地の再編成は市区改正によって生じた最も顕著な変化である。土地再編成の結果は「非短冊状の敷地」と「短冊状の敷地」に分かれる。「非短冊状の敷地」に対し、新たな建築類型が生まれる、もしくは建築の変形が生まれるなど建築の変容は当然の結果だと考えられる。それに対し、「短冊状の敷地」には元々「街屋形式の店舗住宅」が予想され建設されたが、後ほど増築するとき、異なるパターンが増築が出てきた。なぜなら、建築の増築パターンは建築形式と土地との関係の具現化であり、市区改正によって都市の外部空間と敷地との関係が再定義されたため、自然に建築の増築パターン、即ち建築の増築の方向も改めて規定されるようになった。

## (二) 外部空間条件の変化

市区改正によって、都市の外部空間構造が複雑になり、敷地の形状が変わらなくても（土地再編成が行われていない）、敷地と隣接する外部空間（主に前面道路のことを指す）の性質が次々に変わってゆくのである。敷地の形状が変わらないため、既存する建築類型はそのまま取り入れられた。しかし、実際の外部空間条件に応じ、やはり既存する建築類型はそのまま適応できず漸次に調整していくのである。その建築的調整は建築全体に及ばず、様々な形の建築の表層として現れている。

今までの研究では、在来都市に内在する「短冊状の敷地—街屋形式の住宅」の関係は市区改正によって引き起こされた都市空間の再編成の最終目的とされてきた。しかし、それは実にどこの都市でも、都市の自然の更新においても存在する原理であり、特に台湾や都市改造以降の都市の更新に特化した原理ではない。「短冊状の敷地—街屋形式の住宅」は最終目的ではなく出発点だと考えられる。台湾特有の建築の増築文化、違章文化が後押しとなり、出発点からの様々な調整のパターンを研究することにより、市区改正以降の都市空間の再編成の実態がより明らかになるのではないだろうか。

## 第六章 結論

この研究は埔里を主要な研究対象とし、日本時代に行われた市区改正計画以降の土地と建築の変容の実態の調査を通じ、都市改造による触発された都市空間の再編成の仕組みを解明することを試みた。結論として、下記の三つの側面から都市空間再編成の全貌と位置づけをまとめる。

- (一) 都市空間再編成論理の修正と補足
- (二) 台湾型都市空間再編成とその特質
- (三) 都市空間の再編成による都市の近代化